

Deers

[ドアーズ]

volume

04

悩みのない
世界は
退屈に違いない。

絵を勉強したことが
ないのですが、
進学してやっていけるか
不安です……。

#18歳の悩み

画材や機材にお金か
かかってしまうのが
少し不安です。

将来は絵を描いていきたいです。
でも、両親が芸大に
進学することを心配しています。

「好きなことをしていいよ」と
親は言ってくれるのですが、
いまいち自分の好きなことが
なんなのかわかりません。

アニメや声優など、
自分の趣味のはずなのに
まわりの目をうかがって
しまいます。

Q 画材や機材にお金がかかってしまうのが少し不安です。



安田昌弘さん
(ポピュラーカルチャー学部音楽コース 教員)

元を取るという言い方も少しおかしですが、学費も含め、機材や画材にかかるお金以上の学びを目指すことをモチベーションにしている学生もいます。学費に相当する設備と学習環境は、大学側もがんばって用意しています。音楽コースでいえば、精華のスタジオや音響施設で第一線で活躍するプロも唸らせる性能があるんです。フルに使えば、それ以上の成果を得ることができますよ。



大石いずみさん
(芸術学部洋画専攻 2年生)

名画と言われる作品を描いた多くの画家が、実は画材づくりから行っています。なので「お金がないから絵が描けない」というのは間違い。先生たちの口癖も「お金がないから」といって、絵が描けないとは言わせませんよ。ですから、実際、精華の洋画専攻ではイーゼルや絵具など画材そのものをつくる授業もあります。「芸大のDASH村」と呼んでほしいくらいです(笑)。

鈴木凜さん (デザイン学部建築コース 4年生)

みんなそれぞれ価値観がありますよね。「そういう考え方があったのか」とハッとさせられることもあるし、その半面「この人はなぜこんな言葉遣いをするのだろう」と考えさせられることもあります。そうした価値観や考え方の違いを楽しんでみてはどうでしょうか？ 私の場合、他人との違いは思わぬところで作品の制作に活きたりします。苦手な人も自分の考えを磨く糧になると考えてみてください！

Q 苦手な子と通学路が一緒なのが嫌です。



大石いずみさん (芸術学部洋画専攻 2年生)

自分の本気度を伝えるために、作品をご両親に見せたり、画塾の先生に相談したりするなど、アクションを起こすことが大事だと思います。私の場合は、美術の先生を巻き込んで親と話し合う場を設けたり、教員免許の取得を条件にしたりすることで説得しましたよ。ご両親が何を心配しているかにもよりますが、芸大は一般の大学では学べないことがあると思います。でもまあ、絵を描くことを志した時からイバラ道、元気がよく踏み外していきましょう(笑)。

Q 将来は絵を描いていきたいです。でも、両親が芸大に進学することを心配しています。

原原麗さん
(マンガ学部ストーリーマンガコース 3年生)

自分の将来やその大学に行っても何を学びたいのか、その大学へ進学するメリットは何か、ご両親にきちんとまず伝えてみてください。それでもわかってもらえないのなら、自己流で学ぶのもいいと思います。芸術系の大学に進学しないといけないわけではないですから。ただ、自分の目標があるならば、やりきってみるべき。あきらめないことが肝心です！

#18歳の悩み

社会と自分のつながりが見えはじめる18歳。「進路」という大きな岐路に迫られ、悩みごとの尽きない年齢ではないでしょうか？ 実際、受験生に「悩み」を募集してみると、進路やお金、人間関係など、不安の声が続々……。そこで今回は、過去に似た悩みを抱えたであろう京都精華大学の在学や教員が、それぞれの視点で回答し、ズバツと解決！ きっと、同じ悩みをもった受験生の参考になるはず。精華お悩み相談室の開幕です！

Q 親知らずを抜くかで悩んでいます。

梅垣篤史さん (人文学部社会専攻 3年生)

生え方によっては深刻な問題になることもあるらしいので、早めに歯医者さんに行きましょう。ちなみに親知らずを抜くと小顔になるとか、いいなあ……。



宮川 裕歌さん
(芸術学部立体造形専攻 4年生)

高校生のころはまだ経験も知識も少なく、好きなものがはっきりとわからない人もいます。私の場合、大学の入学前後で手に入る情報量が大きく変わりました。少しでも興味があることに近づけば、芋づる式にさまざまな情報や知識に触れることができます。そうするうちに今まで興味なかった分野でも、「あれ、コレおもしろいやん」と気持ちが変わり興味や湧いてくることも。昔嫌いだっぴりマンが好きになることだってありますから！

辰家瑞穂さん
(マンガ学部キャラクターデザインコース 2年生)

「時間を忘れて没頭できること」と置き換えてみてはいかがでしょう？ それかあなたの好きなことを見つけるヒントになるかもしれません。

Q バンドを組んでいます、周りにうまい人が多くとても悔しいです。

岩永理子さん (ポピュラーカルチャー学部音楽コース 3年生)

2年生の時、プロのミュージシャンでもある高野寛先生の授業で、同じような悩みにアドバイスをいただきました。歌がウマイとかヘタではなく、私が一生懸命やったことに「私らしさ」が出ると。ウマイ、ヘタで悩むのではなく、大切なのは「自分がどれだけ楽しめるか」だと気づくことができました。



ケツソクヒデキさん (デザイン学部イラストコース 教員)

まあ不安ですよ。しかし、勉強をしたことがないのは単に経験がないというだけです。経験をしてみればいいんじゃないでしょうか。それと進学後に重要になってくるのは本人の意志の部分です。ウマイ、ヘタはあまり関係ありません。うまくなればいいんです。最初は他人と見比べてへこんでしまうかもしれませんが、自分を信じて必ずうまくなるんだ……という意志をもつことが大切なのだと思います。必ずうまくなれますし、「プロになるんだ！」という決意があればなれると思います。不安だからやらないのか、不安でもやるのか、その決断は自分でするしかありません。



大石いずみさん
(芸術学部洋画専攻 2年生)

Q 絵を勉強したことがないので、進学してやっていけるか不安です……。



大石いずみさん
(芸術学部洋画専攻 2年生)

全然気にしないで大丈夫。私も普通科で美術の授業はあまりなかったんです。芸大志望だったので画塾には通いましたが、それでも専攻の油絵(洋画)を学びはじめたのは高校3年の春。AO入試まで油絵具を使ったことがないという子もいました。単に技術だけではなく、考え方や表現を評価してくれるのだと思います。もしコンプレックスになるのであれば、デッサンは勉強しておく心の支えになるかも！



安田昌弘さん
(ポピュラーカルチャー学部音楽コース 教員)

Q アニメや声優など、自分の趣味のはずなのにまわりの目をうかがってしまいます。

坂本拓馬さん
(マンガ学部アニメーションコース 教員)

自分が好きなものを隠す必要はないですよ。中学や高校というコミュニケーションのなかでは声を大にして「アニメが好き、声優が好き」とかは言えないかもしれませんが、でも、精華では自分の好きなものを自由に表明することができる文化みたいなものがあります。



安田昌弘さん
(ポピュラーカルチャー学部音楽コース 教員)

社会に出た時に必要なものだけを学んでいたら、不測の事態に対応できる力は生まれません。世の中の当たり前だと思っていた「常識」が崩れた時、そこで対応できる力こそが知識ではなく教養。必要なことだけを学ぶのでいいなら、芸大は不要です。工学部や医学部だけいい。教養は人間の深さを生みます。



梅垣篤史さん
(人文学部社会専攻 3年生)

教養！ 難しいですよ。たとえば、チャンネル数の少ないテレビより、多チャンネルのテレビの方が、観る楽しさが多いですよ。そのアンテナになるものが教養ではないでしょうか。芸術作品や音楽など「よくわからんし、こんなもん必要ない」と切り捨てたより、その作品の素晴らしさに気づいて楽しめる人の方が、人生が豊かだと思うんです。それに、多くのことを知っている人はやっぱり強い。生きるうえで選択肢が広がるとは思います。

Q 「好きなことをしていいよ」と親は言ってくれるのですが、いまいち自分の好きなことがなんなのかわかりません。

居川正直さん (人文学部社会専攻 3年生)

好きなことは焦って探しても余計見つからないと思います。日常で無意識にやっていることが、じつは好きなことだったりするかも。毎日の行動を書き出してみたらどうでしょう？



Q 「教養をつけろ」といわれます。そもそも教養ってなんですか？

Q 将来、コミュニケーション能力が必要になるとは思っていますが、自信がありません。



宮川 裕歌さん
(芸術学部立体造形専攻 4年生)

芸術系の大学は、一人でコツコツ作業するイメージがあると思うのですが、じつは「人に伝える力」を学ぶ機会が多いんです。たとえば、「合評」として授業でつくった作品をみんなの前で発表し評価し合う機会。クラスメイトの考え方や制作の意図を聞き、それに対して意見を述べることも求められます。もちろん、自分の作品のコンセプトを他者に伝えることも必要。この合評の繰り返しで、自然とコミュニケーション能力をやるいうことができますよ。